

## 環境管理センター20周年によせて

## —最近10年の歩み—

環境管理センター長

篠 田 純 男 (薬学部)

岡山大学環境管理センターはその前身である特殊排水処理施設が1975年9月に設置されて以来、20年を迎えました。10周年の1985年には「10年の歩み」と題する資料集を発刊しましたが、今回は本誌を20周年特集号として組みました。

10周年の時点で、現在の無機、有機、洗浄排水、生活排水の4部門による構成が既に完成しており、制御管理室や各処理施設棟などの建物も出き上がっていたので、組織施設面ではこの10年に大きな変化はありませんでした。最初の10年が建設と基礎固めの時期であったのに対して、この10年に安定運営・発展の時期であったと言えるでしょう。この間、人事面では1991年から高橋教授の後任として私がセンター長を引き受け、各部門長あるいは部門長補佐には津島地区の自然科学系学部の色々な先生方に務めていただきました。専任職員では伊永隆史助手が1993年に工学部助教授を経て富山工専教授に転出し（現在は徳島大学教授）、後任としてかつて本センターの技官を勤め、信州大学に転出していた井勝久喜氏を助手として迎えました。また、福濱幸俊技官が転出したあとには田中雅邦技官を迎えて職務を引き継いでもらっています。現在はその他に、加瀬野悟助手、藤本教尊技官、竹内文章技官、さらに技術補佐員として斉藤敏伸、宇津綾子の2人がおられます。技術補佐員は3年以上在職できないので、この10年の間にも10人の人達のお世話になりました。岡山大学は他大学と異なり廃液処理の外部委託を行っておらず、瀬戸内海環境保全特別措置法および水質汚濁防止法に基づくCOD総量規制など厳しい排水規制を受けていますが、津島地区の排水は公共下水道に接続されていないので、大学独自で排水処理を行わなければならないなど、環境管理に多くの人手がいるのが現状です。技術補佐員にも専門的な仕事をしてもらっているのですが、勤務年限が限られているので、十分にその技能を発揮しつくさないまま交代してもらわなければならないのが問題です。後述のように排水規制が厳しくなり、規制項目が大幅に増加しました。排水規制への対処や廃液量の増加への対処などで業務量が一層増加する傾向にありますが、現状では人員増加は難しく、技術補佐員の問題をも含めて岡山大学の環境管理の在り方を考え直さなければなりません。

設備面では、無機および有機処理装置の大幅な改修を行いました。これらは発足当初の1975年および1977年に設置したもので老朽化が進んでおり、毎年少しずつ手を入れるとともに、設備更新の概算要求をしておりましたが、文教予算の厳しい折りから概算要求での設備更新は無理と判断して、営繕で大幅改修を行うとともに処理能力・性能のアップを行うことにしました。有機廃液処理の改修を1991、92年度に行い、ついで1993、94年度に無機廃液処理装置を改修しました。基本的には従来システムを生かしていますが、有機の機械などはほとんど新しいものに入れ替えられ、処理能力もかなりアップしました。しかし、廃液量は益々増加し続けており、現在の設備では限界に達するのが目に見えているので、上に書いた人事

面と同様、処理システム自体を根本的に見直さなければなりません。

環境管理センターは岡山大学の排水を適正に管理するのが業務ですが、大学の共同利用施設である以上、教育研究での成果も求められます。2人の助手を中心に排水処理・環境保全に関する研究・技術開発を行って大学の排水処理の適正化に生かすとともに、関連学会や大学等廃棄物処理施設協議会（大廃協）で発表して来ました。

大廃協は各大学の環境保全、主として排水管理を担当する施設の協議会ですが、技術開発成果やその他の情報交換を行う会議で、当初は国立大学の連絡会として組織されていましたが、昭和58年からは私立大学を含めた会となって現在に至っています。岡山大学は発足当初からこの会に積極的に参加して、毎年成果報告を行っており、高橋前センター長と私が会長を、伊永助手が理事を務めるなど、会の運営にも主導的役割を果たしてきました。平成4年には大廃協が中心になって中国、韓国、台湾、タイ、米国、カナダの人達を招いて大学等の廃棄物処理に関する国際シンポジウムを東京で開催しましたが、ここでも伊永助手が事務局長を務めて会の運営に当たりました。この会は平成6年に中国・杭州で第2回を開催しており、次は平成8年にタイ・バンコックで開催することが決まっています。

環境教育の面では、各学部からの見学者を受け入れており、現在では自然科学系の殆どの学生はいずれかの時点でセンターを見学しており、文化系の学生の見学も増えています。また、有機廃液受け入れ時の実習、無機および有機廃液部門の技術指導員講習会、洗浄・生活排水部門水質管理員講習会などを通して、各部局への環境教育・情報提供を行ってきました。さらに、6月の環境月間にはセンターの一般公開を行って学内だけでなく、学外の人達の見学も受け入れています。センターの一般公開は1984年に当時の環境週間に合わせて開催したのが始まりで、数年続いたあと、一時中断していましたが、1994年から再開しています。1995年の公開では、NHK、RSK、OHKなどのテレビ、山陽新聞、日刊工業新聞などで取り上げていただきました。その他、学外向けの活動としてセンターのメンバーが世話役となって、産官学の環境関連の人達の集まりとして岡山・香川環境資源懇話会を1988年から組織しており、講演会、技術講習会、見学会、R&Dサロンなどを開催しています。

今日では、オゾン層破壊や地球温暖化など広域な環境問題が話題となっていますが、地球レベルでの環境保全を図るためには、地域レベルの環境問題を大事にしなければなりません。センターから度々ご連絡しているように、1994年から排水基準が厳しくなり、多くの有機溶媒や農薬などが規制項目として加わりました。この中にはジクロロメタンなど研究室で汎用されている溶媒が含まれています。さらに、1996年からは岡山県条例で窒素およびリンの上乗せ基準が適用されますので、厨房排水などに注意が必要になってきます。Think globally, act locally! まず自分が働き、学ぶキャンパスの環境保全が大切です。一層のご協力をお願い致します。